

No.	委員からの質問・意見	事業者回答	委員からの再質問・意見	事業者回答
1	植物の移植後の調査結果を見ますと、オオシロガヤツリ、ヤナギヌカボは生息が確認できず絶滅を強いた形になっています。元々数が少なかったことや獣害の影響などを考えても、そもそも移植先の選定が妥当だったか疑問が残るように思いました。 比較的高い定着率を維持しているハリマツムシグサの「移植2」と比較してさらに、移植先の選定プロセスの重要性が浮き彫りになったと感じました。	今後も調査を継続し、状況に応じて対策を検討します。	—	—
2	水生動物の保全に関して、特にビオトープ [3]についてもその規模が小さいため、環境が安定しないのでは考えられます。近くに素掘り側溝があり、そこではある程度の水量が確保されているようですが、側溝は本来の管理・観察の対象とはなっていないと思いますので、ビオトープの改修を行うなどして、より良好な環境に改善していただければと考えます。 移植した貴重な植物、オオシロガヤツリ、ヤナギヌカボがイノシシによる掘り起こしと考えられる被害により消失したとの結果は残念ですが、イノシシによる植生の被害は、事業地域内のほかの地点でも広範に起こっているのでしょうか。また、これらの種は事業地の非改変部では生育が見られるのでしょうか。もし非改変部で生育しているようなら、それらの個体群に対する獣害の予防的な措置など、より積極的な保全についても検討していただければありがたいと思います。	ビオトープや側溝等含め管理・観察しています。今後でもできる限る水生動物の保全に努めます。 イノシシの掘り起こしは改変区域では確認していますが、非改変区域では確認されていません。 非改変区域でのオオシロガヤツリ、ヤナギヌカボの生育は確認されていますが、今後も調査を継続します。	—	—
3	p.39 4-4 (2) 1)調整池 調整池、ビオトープの水温、pH、CODの計量結果の表の「≒」はどういう意味でしょうか。 計測機器から7.5と読み取れたのであれば、結果は「7.5」です。 アナログ表示の機器で針が揺れ動いていたからという意味で「≒7.5」とされているのなら、「≒」は不要です。 「≒18～20℃」というのは、何回か測定したら18℃から20℃の間の値だったという意味なら、「18～20℃」と書けばよいと思います。 計量結果に「≒」の表示は必要ないですし、信頼性を示す数値の表示とはなりませんので、削除した方がよいと思います。（水質の測定結果では≒の表記はありません。） なお、要約書ではp.6に示されていますが「約」という表記になっています。こちらも、水質の測定結果と同様、測定された値、として約などはつけずに、7.5、や、18～20℃という表記でよいのではないのでしょうか。	次回以降ご指摘のとおりに変更致します。	—	—
4	これまでも動物をビオトープへ移植しては居なくなる状況だったと認識しております。これまでの移植の経過を時系列で順を追ってまとめてください。昆虫の成虫は翅があり、飛ぶことができます。移植先が不適切だとすぐに出ていきますし、好適なら自分でそこを選ぶはずで。現状移植先ではなく、改変地域で採集されていることは、ビオトープが対象種の生息環境として機能していないことを示していると思います。	ビオトープ「3」では確認できませんでしたが、ビオトープ「4」では確認しています。昨年度もビオトープ「4」で確認しています。オタマジャクシやヤゴの動物も確認でき、動物が生息する状況を維持するように努めています。	—	—
5	—	—	多くの委員から移植先やビオトープがうまく機能しているのかについて問題が指摘されていますが、事業者からの対応は少し具体性を欠いているのではと感じました。 万が一、移植先やビオトープが機能していなかった場合の対策については書かれておらず、このまま観察を続けるとあるだけです。事前に対策についてある程度具体的に考えてあることが望ましいです。生物（特に植物）はその場から消えてしまえば元に戻るのが困難であり、事前の対応の柔軟性が求められます。神戸市の貴重な生物がこのように少しずつ消えていくのは非常に問題だと感じております。	移植先では防護ネットや点滅灯等を設置し、猪等がよりつきにくい環境を整備していますが、今後も調査を継続します。 ビオトープでも動物は見つかっております。また、ビオトープ以外にも素掘り側溝や水路、水溜まりなど当初計画したとりに動物が生息する状況を維持するように努めています。